

確かな言葉の力を育てる小学校国語科授業づくり

-対話力の育成を中心として-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
北田 奈緒子

実習責任教員 西村 公孝
実習指導教員 金児 正史

キーワード：確かな言葉の力，対話力，主体的な学び，話すこと・聞くこと

I 実践研究課題の設定と研究構想

1 課題設定の理由

(1) 実習校の概要

実習校は、徳島県北部に位置し、全校児童 75 名、職員数 14 名の小学校である。実習校の児童は素直で明るく、真面目な態度で学習に取り組む子どもが多いが、中には自己を表現することに苦手意識をもっている児童もいる。

(2) 現代社会の変化

文部科学省（2016）は、複雑で予測困難な現代社会において「対話や議論を通じて多様な人々と協働していく力」や、「試行錯誤しながら新たな価値や問いを創造していく力」を確実に育むことが大切であるとし、「全ての学習の基盤となる言語能力の育成を重視することが求められている」と述べている。

2 実践研究の目的と構想

(1) 課題の設定およびめざす子ども像

学校教育の今日的課題と、実習校における児童の実態、そして自らの課題意識である「子どもたちの確かな言葉の力を育てたい」、「子どもたちが対話的に学びを深める授業をめざしたい」という思いから、研究課題を設定した。めざす子ども像は以下のとおりである。

- ・主体的に言葉を学び続ける意思をもった子ども
- ・他者としなやかに関わる中で自らの学びを深める子ども

(2) 実践研究の目的と構想

本実践研究の目的は、めざす子ども像の実現である（図 1）。目的達成のため、対話力育成に関する先行研究の理論と手法に学び、授業づくりに生かすことと、授業づくりの成果と課題を検証することを課題とした。

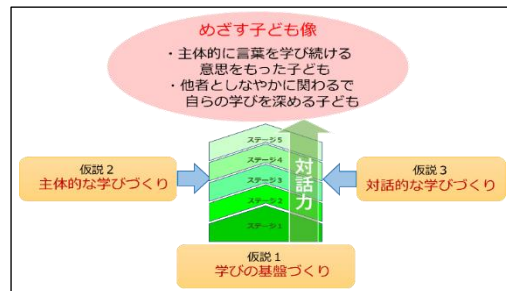


図 1 めざす子ども像実現のためのプロセスイメージ

授業づくりにおける重要な 3 つの視点についてそれぞれ仮説と手立てを設定した。

仮説1 【学びの基盤づくり】	仮説2 【主体的な学びづくり】	仮説3 【対話的な学びづくり】
対話力育成をめざした帯学習での実践を継続することで、子どもたちの対話を活性化する基盤が涵養されるだろう。	授業の導入時における「課題設定」と「見通し」、終末における「振り返り」に意識を向けた授業づくりを行うことで、主体的に言葉を学び続ける意思をもった子どもを育てることができるだろう。	自己内対話と他者との対話を往還させることで、他者としなやかに関わる中で自らの学びを深める子どもが育つだろう。
仮説1に対する手立て ①お互いを認め合い聞き合える 受容的な雰囲気づくり を行う。 ②対話するための 基礎的技術 を養うスキルトレーニングを継続して行う。 ③対話力を段階的に示し、 目標設定と自己評価 を行う。	仮説2に対する手立て ①リアリティのある質の高い「 課題設定 」を行う。 ②学習を可視化し「 見通し 」を持たせ、自立的に学べるようにする。 ③「 振り返り 」で学びの価値を実感させ、次への意欲に循環させる。	仮説3に対する手立て ① 自己内対話 を重視し、一人一人が自分の考えをもてるよう支援する。 ②他者との対話の際には、対話のねらいを明確にし、 手順を可視化 する。 ③自己内対話と他者との対話を 往還 させ、新たな解や智慧を共創できるようにする。

II 先行理論研究の整理と実践課題への応用

田村(2018)は、主体的な学びとは「学習者としての子ども自身が自らの学びをコントロールできることである」とし、留意点として、①リアリティのある質の高い課題設定、②見通し(学習の到達点やそこへの道筋)、③振り返り(自らの学びを意味づけ・価値づけして自覚し、他者と共有する)が挙げられている。

本実践研究では、多田(2018)を中心とした先行研究をもとに、対話力の定義を「自己および様々な他者と語り合い、新たな智慧や価値・解決策などを共に創り、その過程で良好で創造的な関係を構築していく力」とする。

多田は、対話力を高めるためには、学習者の対話力の状況を把握しておくことがその第一歩であると指摘し、対話力の段階を5段階に分類した(表1)。また、対話型授業に必要な12の要件を挙げている。この中から、本実践研究において特に①受容的雰囲気づくり、②自己内対話と他者との対話の往還、の2項目を重視して取り組みたいと考えた。

表1 多田による対話力の段階的 분류

対話のステージ	学習者の状況
ステージ1	対話に参加する意識が希薄で、自分の考えが持てず、また、語るに足る体験や考えを持っていることに気付かず、傍観的な態度の子どもたちが多い。
ステージ2	発言力のある子が数多く発言しているが、自分本位で、共創意識が希薄である。他方、自分の考えを持ち始めたが、伝える自信がなく、自己表現しない子たちもいる。
ステージ3	自分の伝えたいことを伝え、相手の伝えたいことを聴き取り、対話できる。しかし一定の結論が出ると、とどまってしまう。ときには少数者の切り捨てや、結論を急ぐ集団浅慮が起きてしまう。
ステージ4	参加者が主体的に参加し、受容的雰囲気の中で内省的な探究をし、また、さまざまな意見・感覚・体験が出され、論議が広がっていくが、意見や感想が絡み合わず、深まっていけない。
ステージ5	参加者全員が当事者意識・共創意識を持ち、多様な見解・対立のズレを生かし、様々な見解や感想を分類・整理しつつ、解や智慧を共創していく。さらに、新たな問いを発見し、次々と知的世界を探究していく。

また、先行実践研究校である、京都市立御所南小学校、岡崎市立小豆坂小学校、名古屋市立大宝小学校・弥富小学校を訪問した。

III 実践研究の実際と分析

1 実践研究の計画

実習校における実践計画を表2のように立てた。また、実践の最初と最後に児童への学習アンケートを実施し、児童の意識の変容を確認するとともに、教職員に聞き取り調査を行い、実践についての意見を求めることとした。

表2 授業実践計画

実践の種類	個々の実践計画			考察する仮説		
	実践学年	実践時期	実践名・単元名	1	2	3
朝の帯学習	第2学年 第5学年	平成31年 4月～令和元年10月	「わくわくトークタイム」	○		
〈話すこと・聞くこと〉の授業づくり	第2学年	令和元年 5月	「キャラクターのかき方せつめい会」をひらこう(全5時間)		○	○
	第5学年	令和元年 6月	聞く力アップでよりよい話し合いを(全3時間)		○	○
対話的な学びをめざす授業づくり	第5学年	令和元年 9月	詩の心を想像してー5年生のお気に入り詩集をつくろうー(全3時間)	○	○	○

2 実践研究の実際

(1) 学習アンケートの実施

実践を行う第2学年(14名)、第5学年(10名)を対象に学習アンケートを実施し、結果から児童の実態と実践の方向性を導き出した。

(2) 朝の帯学習「わくわくトークタイム」

児童の対話を活性化する基盤をつくる活動を継続的に行うこととした。その中で、「お互いを認め合い聞き合える受容的な雰囲気づくり」と、「対話するための基礎的技能を養うスキルトレーニング」を行うこととした。毎回、最初に「目と耳と心で聞く」等、3つの約束を確認し、対話力育成のための活動を行った後、振り返りを行った。

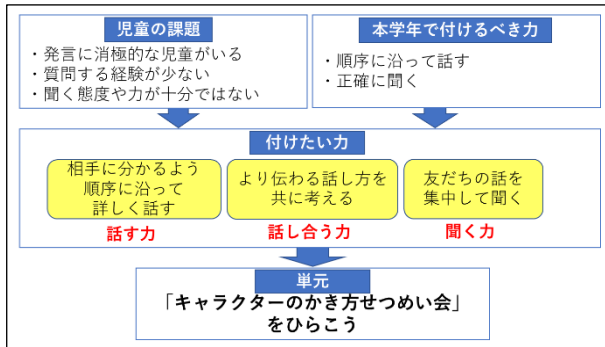
(3) 〈話すこと・聞くこと〉の授業づくり

対話の基礎力としての〈話す力・聞く力〉を育成するため、児童が主体的に学べる課題を設定することや、付けたい力に応じた対話場面を設定することを中心として授業づくりを行った。

① 第2学年における授業づくり

◇単元名 「キャラクターのかき方せつめい会」をひらこう（全5時間）

◇単元設定の理由と単元目標（下図）



◇学習計画

- ①学習課題をつかみ、学習の見通しをもつ……（第1時）
- ②分かりやすい説明の仕方を考える……（第2時）
- ③④キャラクターの描き方の説明を考え、ペアやグループで説明を合ったり助言を合ったりする（第3、4時）
- ⑤キャラクターの描き方説明会を開き、聞き手に分かりやすい説明の仕方を確かめる……（第5時）

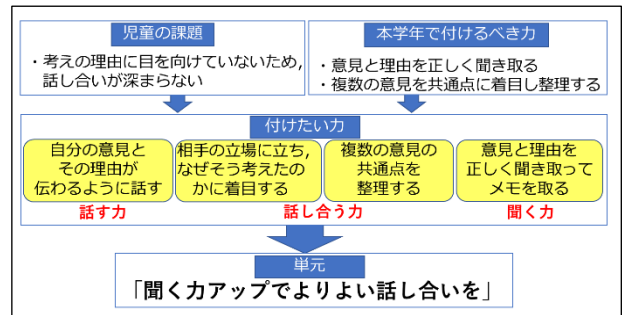
◇考察

3年生の児童を招待し、「キャラクターのかき方せつめい会」を開くという活動目標を立てた。順序に沿って詳しく説明するという目的を意識して活動できる場を設定し、相手に伝わりやすい説明の練習をすることをねらいとしてグループでの対話場面を設定した。自分の選んだキャラクターの描き方の説明を考えた後、グループ対話の場面において、友だちや教師との関わりの中でよりよい伝え方へと変容させていく姿が多く見られた。また、児童にとって身近で心惹かれる題材を選んだこと、相手意識と目的意識のある活動を単元の最後に設定したことにより、全員の児童が意欲的に学習に取り組むことができた。

② 第5学年における授業づくり

◇単元名 聞く力アップでよりよい話し合いを（全3時間）

◇単元設定の理由（右上図）



◇学習計画

- ①学習の見通しをもち、意見と理由を聞き取り整理する方法を話し合う……（第1時）
- ②教科書教材を用いて意見と理由を聞き取り整理し、グループで紹介し合う……（第2時）
- ③「みんなが楽しめるお楽しみ会」についてグループで話し合い、おすすめの提案とその理由を決める（第3時）

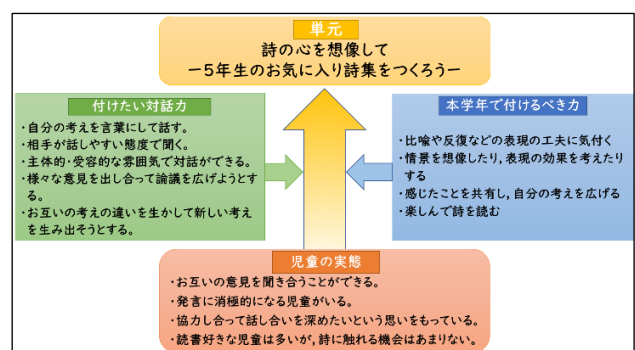
◇考察

本単元では、第3時に身近な生活についての話し合いを行う活動を設定し、そこで生かせるよう、よりよい聞き方の練習をするというリアリティのある課題設定を行った。質問形式の振り返りシートを事前自己評価にも用いて、単元で身につけるべき言葉の力を意識して学習できるようにした。児童の実生活に即した話し合いを単元の最後に設定したことにより、目的をもって自律的に学習に取り組むことができた。1時間ごとの振り返りを行ったことにより、少しずつ段階を上げながら次の学習の目標設定に生かすことができた。

(4) 対話的な学びを目指す授業づくり

◇単元名 詩の心を想像して－5年生のお気に入り詩集をつくろう－（全3時間）

◇単元設定の理由と単元目標（下図）



◇学習計画

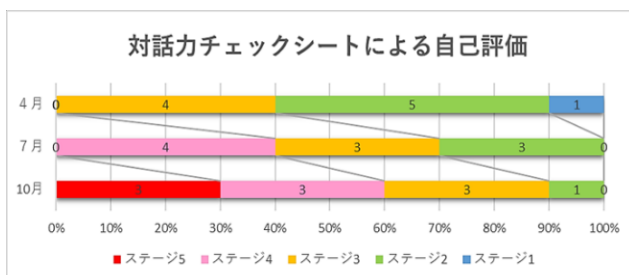
- ①学習の見通しをもち、2編の詩を読む……（第1時）
- ②2編の詩のうち自分の選んだ詩についてグループで対話する……（第2時）
- ③並行読書でそれぞれが選んだ詩についてグループで対話する……（第3時）

◇考察

授業実践に際し、対話力構造化表を作成し、個別の評価シートに児童一人一人の実態把握と手立ての考案を行った。グループ対話においては、第2時は教科書教材、第3時は並行読書した中からそれぞれが選んだ詩について話し合った。対話のねらいと手順等を可視化し示したことにより、目的意識をもって計画的に対話を進められていた。対話の始点として、お互いが選んだ理由を想像しあったことで、より自然に意欲的に対話することができた。活発に意見交換する中で、感じたことを共有し自分の考えを広げながら詩のよさを味わうことができたと思える。また、対話を深めるために着目すべき視点や、お互いの考えを引き出すための質問例を示したことにより、お互い質問し合う中で考えを深めることができた。

◇対話力チェックシートについての考察

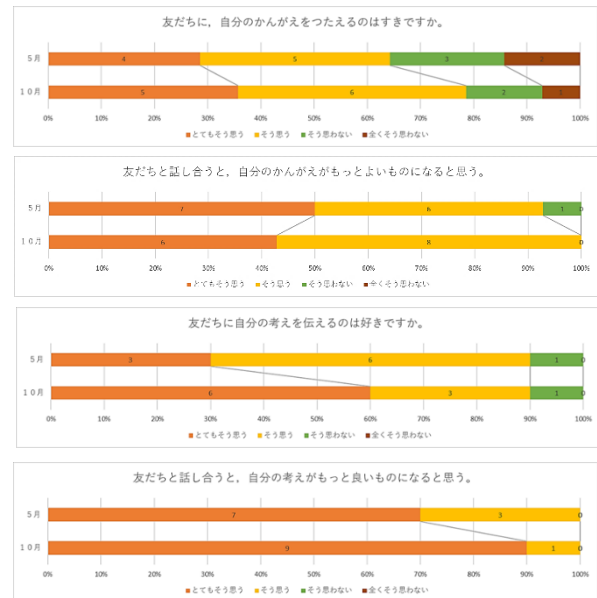
第5学年においては、対話力の目標設定と自己評価を継続して行ったことにより、対話力に対する認識と、よりよい対話への意欲が児童に生まれた。下のグラフ2は、対話力自己評価の3回の比較である（グラフ内の数字は人数）。



グラフ1 第5学年の対話力自己評価の変容

(5) アンケート結果から見える児童の変容

第2学年および第5学年の児童に、積極的に考えを伝える意思や、対話に対する意識に肯定的な変容が見られた（グラフ2）。



グラフ2 学習アンケート結果の変容

3 実践研究の成果と課題

本実践研究の成果として、3点挙げられる。

- ①対話の基礎力育成をめざした活動の継続によって対話を活性化する基盤が醸成された。
- ②「課題設定」、「見通し」、「振り返り」に意識を向けた授業づくりを行うことにより、主体的に言葉を学び続ける姿に一步近づいた。
- ③自己内対話と他者との対話を往還させることにより、対話によって自らの学びを深める姿が見られた。

本実践研究の課題は、次の2点である。

- ①学びの基盤作りは、学習生活全般を対象とし、継続して行うことが求められる。
- ②付けたい力と児童の実態から、より適切な題材設定と時間配分が必要とされる。

〔引用・参考文献〕①田村学(2018)『深い学び』東洋館出版社、②多田孝志(2017)『グローバル時代の対話型授業の研究 実践のための12の要件』東信堂